

夕刊1面の「この道」は芸能史家、小沢昭一さんが執筆している。野球界のご意見番、張本勲さんの時は夢中になって読んだ。文化面にはワイン王、長沢鼎(渡辺正清)が連載されていた。論壇・時評も面白い。夕刊が面白いのは、読み物として執筆者の顔が見えるからではないか。

かつて、幕末の英外交官アーネスト・サトウ伝を取り上げた連載(萩原延壽、朝日夕刊)を読み、それが筆者の研究の出発点になったことを思い出した。地方紙で夕刊を廃止しているところが増えていく。メディア企業ばかりでなく、将来のための経営改善策の「ひとつ」であり、誰もが遅れて来た「ザウルス(恐竜)」にはなりたくないのだ。

ストレートニュースに面白さを求めるのは筋違いだろう。日々起きている出来事を報じることが第一だからだ。他方、特集や調査報道で社会問題を明らかにして、問題解決の視座を示す。本紙「こちら特報部」などがそれに当たる。一読者としては、例えば「公益法人に巨額予算」(12月7日)は天下り問題よりも、教育現場が抱える留学生問題、ひいては日本社会の将来に危機感を抱き、「膨張スイカ預かり金」(15日)は公共サービスが百五十億円という殿様商売で許されるのかという怒りに共感し、「国民目線で議論を」(17日)は半世紀タブー視されていた象徴天皇の存在に目を向けさせる。

読者を育てる紙面作り

少なからず、それらが争点となり、健全な民主主義社会を育成し続ける。それが新聞メディア、ジャーナリズムの真骨頂であり、私たち読者が期待するものであるはずだ。それは「いま、言わねばならぬことを言う。言うべきことを言う」(桐生悠々)ことであり、決して「言いたいことを言う」のではない。表現の自由、言論の自由、言論の多様性に微妙な違いがあるものの、いずれも担保されていることが民主主義社会の根源である。

原寿雄・元共同通信社社長は新聞メディアの再生の道を探る中で、「情報棄ててジャーナリズム滅び、ジャーナリズム滅びて民主主義亡ぶ」(「ジャーナリズムの可能性」、岩波新書)という。この言葉は重く受け取らねばならない。



鈴木 雄雅

「新聞は世論を反映しているか」「新聞が世論を作るのか」は、古くて新しい問題でもある。ジャーナリズムは誰のためか、何のためにあるのか。難しい問いかけである。難しい問いかけである。「公共の利益」という答えもある。では、その「公共の利益」とは何か。

忘れてはならないのは、新聞メディアやジャーナリズムは、私たち人類が作り出した産物である。新聞を読み、批判できる読者を増やし、その中から新しい新聞人を育てるのも、大切な視点であろう。

(上智大学教授)

※この批評は最終版を基にしています。

新聞を 読んで